

〈研究発表要旨〉

## 教育における感性の問題 —美的教育論を中心に—

石 村 秀 登

(別府大学文学部教職課程 講師)

研究発表会(平成13年6月6日)での内容は下記の通りである。

### I 問題設定

これからの教育では、「生きる力」を育むことが重要とされ、その「生きる力」の核となるものとして豊かな心や感性が挙げられている。学校では、ゆとりある教育を推進し、感性を身につけさせねばならないとされている。これに対して、学力低下に対する危機感からの批判は数多い。今後の我が国の科学技術発展を考えれば、客観的、科学的事実としての知識を理性的に学び、科学的素養をしっかりと身につけることがますます必要になってくるというのである。

これらの文脈で感性という語が多用されるようになってきているが、しかし、感性は、単なる感受性や心の問題ではなく、また、知識や理性と対立するようなものでもない。

### II 美的教育の理念

美的教育の歴史的展開を概観してみると、18世紀から19世紀への移行期に、シラー(F.Schiller)が、美的教育論(Ästhetische Erziehung)において、美によって感性と理性の統一を図ることが必要であると主張した。また、19世紀末から20世紀初頭にかけてのいわゆる「改革教育学(Reformpädagogik)」においては、芸術教育運動がさかんになり、リヒトヴァルク(A.Lichtwark)は、子ども自身の体

験とそこから生ずる表現、形成能力を発達させることを重視している。近年では、1980年代からのドイツで美的教育の議論が活発になる。これは、美的なるものが、ポストモダンの状況、すなわち近代への懐疑的な態度からの脱却の鍵となりうるのではないか、という期待感の現れである。そして、近代科学主義によって主導されてきた学校教育について、美的な次元が教育学的に考えられるようになる。

### III 美的教育の意義と可能性

#### —「ミューズの的=美的教育」論から

「ミューズの的=美的教育(Musisch-Ästhetische Erziehung)」論は、1987年からのドイツ・チュービンゲン大学の初等教育に関するプロジェクトである。これは、上述のポストモダンの状況からの脱却という背景からではなく、学術と芸術を含む文芸一般を志向し、感覚的知覚に関わる諸感覚の経験(美的経験)を重視することによって、人間の全体性を回復し、人間の調和的発達を根底から支えようとする教育原理から展開されているものである。例えば、運動教育や砂遊びなどによって、感覚の十全たる使用、すなわち感覚器官を研ぎ澄ますことの意義が明確にされている。我々は、このような、教育における諸感覚の経験、すなわち美的経験のレベルから感性を捉えなければならない。か

くして、感性は、教育作用におけるもっとも基本的な性格を持つものとして明らかになってくる。したがって、このような原理は、前教科的、教科横断的にはたらくべきなのであり、教育実践における教科横断的な学習の必要性を示している。

#### IV 今後の課題

今後は、さらに感性について考察を深めるために、認識論として理性的認識の下位におかれる場合が多い感性的認識を再評価していくとともに、ファンタジーや文芸の教育学的意義についても明らかにする。また、美的教育論的意義をもつ教育実践の検討として、ドイツにおける事実教授 (Sachunterricht) や我が国の総合的な学習の時間を取り上げてみたい。